

特集❖JASTJ 設立30周年

JASTJの歩みから読みとりたい「人と時代」 —あなたにとっての30年は？—

今年の7月1日は、JASTJが設立されてから30年に当たる記念の日。30年前のこの時期、みなさんは何をされていたでしょうか。まだこの世に生まれていなかった20代の会員もいるかもしれません。30年と言わずとも「10年ひと昔」。歴史時計の針を少しだけ戻して、科学・技術をめぐる時代の変化と人々の思いを振り返ってみませんか。歴史的に俯瞰することで、初めて未来への展望が開けるのではないのでしょうか。今年度は一年を通して「これまでの歩みとこれから」を考えませんか。

(理事 佐藤年緒)

●世界とのつながりがスタートに

会発足の原点は「世界で活躍するジャーナリストとのつながり」。契機は1992年11月に東京で開いた初の科学ジャーナリスト世界会議だった。ユネスコ(国連教育科学文化機関)の呼びかけで、国内の科学記者らが会社組織を越えて集まり、組織委員会を発足させてプログラムを作成し、資金を集め、31カ国から165人が参加した。

ブラジル・リオデジャネイロで開催された地球サミットの半年後だけに、地球環境問題やエイズに象徴される医療報道など、世界共通の課題に科学技術は貢献できるかが大きな主題。日本の科学メディア関係者が初めて顔を揃え、互いに抱える課題を出し合ったことが組織を越えた連携のきっかけになった。世界大会の終了後、折角できたそのつながりを生かそうと誕生したのがJASTJである。

●「月例会」に加えて「賞」や「塾」

講師を招いての月例会が会の中心的な活動であることはいと変わらない。第1回は1994年10月、米澤富美子さんによる複雑系物理の講話で始まった。新聞、放送界の科学記者の大御所が、第一線の科学者から真剣に学ぼうとしている姿勢は、当時若造だった筆者からみてとても新鮮であった。

2003年に会員対象を科学コミュニケーターにも広げ、会費を半額にし、若手や中堅世代にも加わりやすい環境を整えるなど、牧野賢治会長(2代目)の下で大改革を行った。その前年から、科学ジャーナリストや科学コミュニケーターの養成のための講座「科学ジャーナリスト塾」の活動も開始し、参加の輪を広げている。さらに科学技術に関する報道や出版、映像などの分野で優れた成果をあげた個人を顕彰する「科学ジャーナリスト賞」も2006年に始め、現在に至っている。

設立の発端になった世界会議は、その後、第2回が1999年にブダペストで、第3回が2002年にブラジルで開かれ、各国の科学ジャーナリスト団体をつなぐ「世界科学ジャーナリスト連盟」(WFSJ)も誕生した。定期的に行われた世界大会にはJASTJからも毎回会員が参加。新型コロナ禍で延期のときもあったが、アジア地域での科学ジャーナリストとの研修や交流も進めてきた。

●30年の活動記録

JASTJ30年間の活動内容は、会報『JASTJ NEWS』が貴重な記録となっており、これまで今号を含めて111号が発行された。100号を記念して2021年10月、JASTJの歴史を振り返る対談(ZOOM井戸端会議座談)が、初代編集長を務めた武部俊一氏(第4代会長)と牧野賢治氏(第2代会長)との間で行われ、設立前史のこぼれ話も載せられている(「会報101号」同年12月号)。

対談ページにJASTJの簡単な活動年表が添えられている。さらに詳しい歴史年表はJASTJのホームページ(HP)の「沿革」(<https://jastj.jp/history/>)で紹介している。これらの年表に記された活動は、会員内部の熱意や努力だけでなく、内外の関係者の理解や協力、応援に負う所が大きい。社会の出来事や事件、経済の変動、技術の進展などの環境の変化にも大きく左右され、それだけ戸惑いや奮闘の跡もうかがえる。

発足翌年の1995年には、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、もんじゅのナトリウム漏れ事故が発生。科学・技術に対する信頼を揺るがす3つの出来事が重なる忘れられない年になった。1999年には臓器移植法にもとづく初の臓器移植が実施され、JCO東海事業所で臨界事故が発生した。

行政改革による中央省庁の再編で、2001年文部省と科学技術庁が文部科学省に統合されたことも、科

学政策を伝えてきた記者や科学コミュニケーションの仕事をする個人に影響を与えたと言えただろう。宇宙や原子力の政策を担っていた科学技術庁の記者クラブも消滅。国家戦略重視の科学政策が進み、生活・文化、教育があいまいにされてきたようにみえる。科学のジャーナリズムやコミュニケーションの意義を理解し、役割を担うことがますますJASTJに求められるようになった。

とはいえ東日本大震災をもたらしした大地震と東京電力の福島第一原発事故、そして新型コロナ感染によるパンデミックでの経験は、科学をどう伝えるか、科学と社会をめぐる課題にまだ結論を見つけれないままに、今日に至ったと受け止めている。

●先人に学ぶ

会発足時の会員は53人、準会員12人、賛助会員2社。会報の創刊号(1994年12月号)に掲載されている会員名簿には、所属や電話、FAX、自宅住所まで記されている。個人情報取り扱いが厳しくなった今では考えられない伝え方であるが、発足時には、会員同士の顔が見え、親密なつながりをつくろうとす

記念パーティーを開催、メッセージも募集

30周年記念パーティーは7月1日(月)午後7時から9時まで千代田区内幸町の日本プレスセンタービル10階で開かれます。30周年を機にJASTJへのメッセージを募っています。30周年記念パーティーサイト(<https://cpk.jp/conference/17/30th-party>)からふるってお寄せください。



↑
詳しくは
こちらまで

30周年記念誌の編集メンバーを募集！ —検証プロジェクトとして活動します—

JASTJ設立30周年を記念して、これまでの活動の歩みを振り返り、会に学んだこと、体験したこと、反省すべきこと、次世代に伝えたいことなどの見解や論考、声などを記念誌にまとめます。JASTJのホームページ(HP)のほか可能な範囲で印刷物として刊行する計画です。

JASTJでは会員の自主的な活動の場として「なんでも検証プロジェクト」が用意されていますので、その一環として「30年の歴史検証」をテーマに実施します。関係する先人たちの取り組み、歩んだ道程、活動について、インタビューしたり、残されている資料(書籍、会報、HP記事など)を読み直したりし、記録や記事にまとめる活動を行います。

参加希望者は、担当の佐藤年緒(メールアドレス: sttoshi@gmail.com)にご連絡ください。

る願いがあったのだろう。

初代編集長の武部さんによると、この当初会員53人のうち、既に鬼籍に入られ方は16人だという。設立期の岸田純之助会長、浅井恒雄事務局長をはじめ、JASTJの発展にかかわった小出五郎理事、柴田鉄治理事らも鬼籍に入られた。戦前・戦中に生まれ、空襲や飢えなどの戦争体験をされた世代でもあり、原子力政策に一家言を持ち核廃絶を願う信念のジャーナリストたちであった。

科学ジャーナリスト賞の選考委員を務めていただいた米澤富美子さん、北澤宏一さんも旅立たれた。さらに活動にかかわってきた会員の訃報も断片的に寄せられたり、消息がつかめなかったりする人もいる。

先人や仲間を想うことは、会の活動を継承し、新しい歩みに向かううえで必要なことだろう。最近、コロナ感染に伴う社会情勢の変化で故人を追悼し、古きを温める習慣が日本社会から消えてしまったようで残念である。30年という一世代が交代する時間経過のなかで、会の歩みをしっかり振り返り、新たな方向を見いだしたいと願う。記念パーティーでの交流と記念誌での会員の健筆を期待したい。

データで見る30年

〔会則の変更〕

「正会員」にジャーナリストだけでなく、ライター、編集者、広報担当者、さらにサイエンスコミュニケーションに携わる科学者・技術者・研究者・産業界・行政官・市民も対象に拡大。広報担当者や研究者を対象にしていた「準会員」をなくす。(2003年)

〔会員数の推移〕

会員53人(うち女性5人)、準会員12人(1994年)⇒110人を超す(2004年)⇒171人、賛助13社(2010年)⇒197人、賛助14社(2016年)⇒203人、賛助11社(2017年)⇒200人、賛助16社(2022年)⇒222人、賛助21法人・企業(2024年)

〔会費、事業費〕

会費2万4000円(1994年)⇒1万2000円、地方会員・学生会員6000円、賛助会員12万円(一口)(2003年)年間事業支出は260万1518円(2003年度)⇒548万6302円(2023年度)

〔事務所の変遷〕

事務所(日本プレスセンタービル)は、これまで計8回の引っ越しの末に落ち着いた。科学技術広報財団(港区赤坂から新橋に)⇒ジェイ・ピーアール内(千代田区九段北から港区北青山に)⇒武田計測先端財団(中央区明石町)⇒東京富山会館(文京区白山)⇒スタジオエル(渋谷区神山町)⇒東京理科大学内(新宿区神楽坂)⇒現事務所